特　集
辞書指導と語彙指導

語彙指導のヒント
――覚えられない原因の特定と解決策

相澤一美

■なぜ覚えられないか

英単語がなかなか覚えられない。これは，英語が苦手な生徒にとっては特に苦痛の種であろう。いやいや，生徒だけでない。英語教師にとっても永遠の悩みの種である。かく言う私も，英国で開催されたある語彙習得セミナーで，ヨーロッパ出身の英語を母語としない研究者の語彙の豊富さに舌を巻き，自分の英語力に絶望した経験がある。

一般に「単語が覚えられない」と言うが，実はこの現象はそう単純ではない。「単語が覚えられない」ことを「単語と出会って意味がわからない」と単純化しても，単語が覚えられない原因には以下の４つのケースが考えられる。

1　その単語と出会っていなかった
2　単語には出会ったが，意味を覚えなかった
3　単語の意味を覚えたが，忘れてしまった
4　単語の意味をたまたま思い出せなかった

ケース１　単語と出会っていなかった

その単語と出会わなければ，その単語の語形や意味も覚えられない。知らない単語に出会ったら文脈から推測するように奨励されるが，前後の手がかりが十分でないと，推測は不可能である。誤った意味で推測し，それが定着する危険性すらある。

単語に出会う機会を増やすためには，たくさんの英語を読んだり聞いたりする必要がある。多読で多くの単語に出会うことにより，辞書や語注で意味を調べたり，繰り返し出会って意味を考えたりするうちに意味を偶発学習することが多い。教師は，生徒がより多くの単語と出会うことを奨励する必要がある。

ケース２　意味を覚えられなかった

新しい単語と出会っても，その単語の意味を覚えなければ記憶には残らない。つまり，出会ったときに記憶への書き込みが不十分では覚えたことにならない。新しい単語情報を未知の言語材料として符号化することを記銘と呼んでいる。「単語が覚えられない」と嘆くケースのほとんどは，この記銘に失敗していると考えてよいだろう。

単語と意味をリストにして覚えるだけではなく，声に出して繰り返したり，異なった例文で意味を確認したりして，記銘を保証することが必要である。一般に，学習時の処理水準が高ければ高いほど，記憶に残りやすいと言われている。

ケース３　意味を忘れてしまった

せっかく覚えた単語も，使う機会がなければ忘れてしまうこともある。一度記銘した情報を記憶に貯蔵することを保持と呼んでいる。

一度覚えた単語の記憶を保持するには，小テストを定期的に実施して復習の機会を設けたり，実際に単語を使う練習をさせたりすることが必要である。単語のリストを眺めるだけでも効果的だ。

ケース４　意味を思い出せなかった

その単語に出会ったとき，またはその単語を使おうとしたときに，たまたま思い出せないということは少なくない。時と場所に応じて語彙エントリーから単語を検索して記憶から呼び起こすことを想起と呼んでいる。

単語を必要な場面で想起できるようにするため

には，記憶に保持した単語を取り出す機会を設けることが重要である。一度その単語を想起できれば，二度目からは思い出しやすくなるであろう。

以上，概観したように，単語を覚えられないのは，記銘，保持，想起の１つ以上で失敗した結果である。原因がどこにあるのかを冷静に分析して，その対応策を取らなければならない。

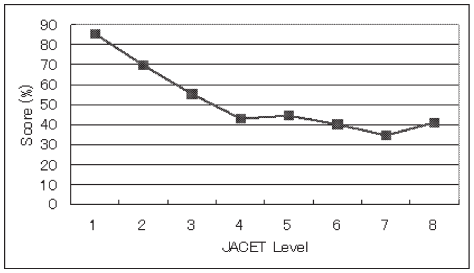
■覚えるための効率を上げる工夫

1．基本語の学習

できるだけ効率的に語彙を学習しようとするのであれば，学習する語彙数をできるだけ絞り込むことが得策である。重要な語彙は，どの分野にも共通する「基本語彙」と学習者の専門別に分かれる「専門分野別の語彙」に分けられるだろう。

基本語彙として，例えば高校入試の場合は「JACET8000」の1000語レベルを，大学入試の場合は4000語レベルまでの頻度の語を挙げることができる。実際には，頻度順の関係でこの中に含まれなかった語彙「Plus 250」が含まれるので，高校入試で1250語，大学入試で4250語となる。

大学入試で頻度4000語までを優先する理由は，筆者が学習者の語彙知識を頻度別に調査した結果によっても裏付けられる。



このグラフは，ある大学のクラスで実施した，JACET8000の頻度別に作成した語彙テストの得点の平均を示している。4000語レベルまでは頻度と得点率が負の比例関係にあるが，5000語レベルを越えると頻度と正答率の関係はほぼ横ばいとなる。つまり，基本語レベルを越えると，頻度と語彙テストの得点の間の関係はほぼ一定してくる。この結果から，基本語の学習を最優先し，その後に学習者が進むであろう専門分野別の語彙を学習した方がよいという解釈が成り立つ。

高頻度の単語の完全学習を目指した方がよい理由がもう一つある。それは，単語の生起頻度という視点である。例えば，government と responsibility はそれぞれ JACET8000の1000語レベルと2000語レベルに属すが，100万語の BNC コーパスの生起頻度では622と93と大きな開きがある。つまり，100万語の英文を読んだ場合，government に出会う期待値は622回であるが，responsibility は93回にしかならない。頻度レベルが接近した単語でも，この場合，出会う期待値は約７倍も異なる。頻度レベルの差が大きくなれば，出会う期待値の差はさらに広がるであろう。高頻度語を漏れのないように学習することが重要である。

2．チェックリスト方式

現在筆者が注目しているのは，岡山大学の寺澤孝文氏らが研究している，潜在記憶を活用した語彙学習である。紙面の都合で詳細は割愛するが，突き詰めて言えば「チェックリスト方式」である。最初に単語と意味を提示して，学習者がそれを学習する。次の段階では，その単語に対して自己評定を「３　良い」「２　もう少し」「１　だめ」「０　全くダメ」の４段階で行う。次の段階では，覚えられなかった単語を優先的に提示して，また同様に手順を繰り返していく。

一見単純ではあるが，チェックリストによってごくわずかの学習成果を潜在記憶に蓄積していき，やがてそれが膨大な数の単語の習得に結びつくというものである。この方法論に準じた DS ソフトが市販されている。また，同様の学習方法は単語カードを使っても実現可能である。

高校時代に，自転車通学の道すがら，手の甲に単語を10語ずつ書いて覚えた思い出がある。今はゲーム感覚で語彙学習ができるようになった。確実に時代が変化していることを痛感している。

（あいざわ　かずみ・東京電機大学教授）